



もくじ

浮世絵とみる昔の暮らしの道具たち 生活・農耕・旅・お土産 ……	P 1
描かれた「江の島土産」たち ……	P 2
浮世絵こぼれ話 20「蚕 <small>かいこ</small> いとなみの図」とみる養蚕 <small>ようさん</small> と生糸づくり ……	P 3
二代目オニカゲ学芸員のページ③「資料の銀ぎらぎん」/ 浮世場なれ／編集後記 ……	P 4



浮世絵とみる 昔の暮らしの道具たち

生活・農耕・旅・お土産

会期

2024年7月13日(土)～9月8日(日)



歌川広重
「東海道五十三回会七 藤沢」



八隅蘆庵
「旅行用心集」



楊洲周延「農民耕作之図」

本展では、「旅」・「生活」・「お土産」・「業種」をテーマに、浮世絵とともに江戸時代の旅や暮らし、様々な職業の道具から漁、養蚕、織物の手工業、農耕などにまつわる道具を展示します。そして藤沢にゆかりのある「江の島詣」のお土産である貝屏風や貝細工も紹介します。

江戸時代に描かれた浮世絵には、商用や寺社参詣、湯治など大衆化されていた「旅」の姿が多く残されています。その中では、菅笠すげがさや合羽かっぱ、印籠、キセルなど旅の必需品がどのように使われてきたか見ることができます。また、江戸時代の暮らしの中で使われてきた箱枕、鏡台、行燈あんどんなどの寝具や灯りの道具などが見られ、往時の生活習慣おうじを今に伝えます。藤沢市が所蔵する民俗資料には、藤沢にゆかりのある江の島土産の貝屏風や貝細工など地域の特色ある名産品があり、これらは江戸のお土産文化で好まれた工芸品や名品・名物として発展しました。

浮世絵とともに昔の生活に欠かせなかった道具たちをご覧いただき、江戸の人々の暮らしと私たちの生活の相似と差異について考えていただく機会となりましたら幸いです。現代ではなかなか見ることのできない道具たちをぜひお楽しみください。

描かれた「江の島土産」たち

黒川敏彦 藤沢市郷土歴史課 学芸員（民俗学）

江戸時代の旅行者も現代人と同様に旅の出費を記録しました。江の島や鎌倉を観光した江戸の住人、中川某が書き記した旅行の記録によると、安政5年(1858)には「貝細工などの土産品が六百二十四文¹と記されています。江戸に帰ってからは江の島の土産として「…鮑のかすづけ、江の島貝細工、…」²を知人らに配っています。

鮑の粕漬けについては、魚屋北溪が天保期(1830-43)に描いた摺物「江島記行 俎岩」(図1)画中に江の島名物の鮑と粕漬けの容器である曲物(薄く削った木の板で作った容器)が描かれており、品物の詳細を知ることができます。他の作家が描いた浮世絵に登場するそれと外見上一致しており、なるほどこれであったかと合点がいきます。

それでは同じく土産として配られた貝細工とは、どのようなものだったのでしょうか。ここで平亭銀鷄『江の島まうで 浜のさざ波』³という江戸時代の江の島ガイド書を見ると、江の島名産として「鮑の粕漬 ひじきの袋入 貝細工くさぐさ 江の嶋貝 幅海苔 うみわた 箱入の貝 貝細工の屏風」が挙げられています。貝細工にどのよう



【図1】魚屋北溪「江島記行 俎岩」

なバリエーションがあったかは分かりません。

「貝屏風」について浮世絵から調べることができます。喜多川歌麿「風流四季の遊 弥生の江之島詣」(図2)について、「…表題とは違って江の島やそれに関するものは何もなく…」⁴とされていますが、実は画中の後ろの人物が担ぐ荷物にくくりつけられている品物こそが江の島詣の帰りを表す、土産の「貝屏風」なのです。貝屏風は畳まれている状態で描かれていて、これと同様な品物を探してみると、いくつかの浮世絵にそれらしきものが描かれています。



【図2】喜多川歌麿
「風流四季の遊 弥生の江之島詣」

横浜市在住であった松沢昭二氏は、著名な郷土玩具収集家であり、失われた郷土玩具を復元しようと試行錯誤されていました。松沢氏は江の島の土産物であった「貝屏風」に着目し、郷土玩具収集家コミュニティで入手した貝屏風の伝世品を基礎に、浮世絵や江戸時代から続く版元「いせ辰」の古い千代紙などを根拠に絵柄を推定しつつ、何年にも渡って江の島や鎌倉の海岸で貝殻を収集して素材をそろえて復元しました。自然環境が激変したために、思うように材料となる貝殻が集まらなかったようです。制作された貝屏風は木の枠に紙を張って台紙とし、その上に貝殻の形状に応じて絵柄を構成し、ご飯粒を練ったのりて貼り付けたコラージュで、江戸の人々にとっても見応えのある品物でした。



貝屏風

¹横田洋「江の島への道」『江の島浮世絵展』図録、藤沢市教育委員会、1987、8

²横田洋「江の島への道」『江の島浮世絵展』図録、藤沢市教育委員会、1987、9

³発行年：天保4年(1833)

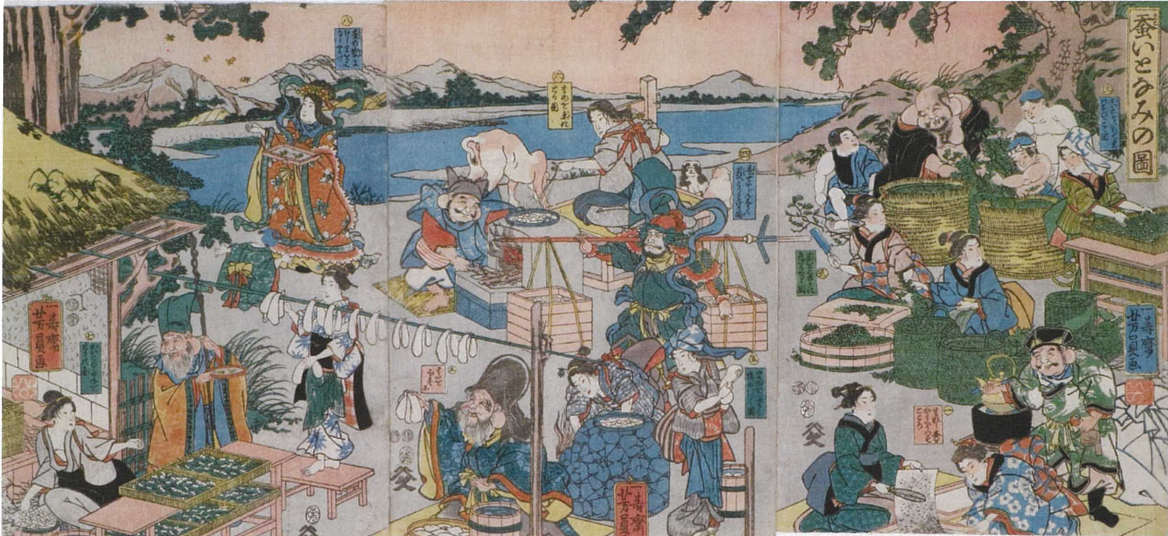
⁴横田洋「浮世絵と江の島」『江の島浮世絵』、藤沢市教育委員会、1984、27

浮世絵こぼれ話20

「^{かいこ}蚕いとなみの図」とみる^{ようさん}養蚕と生糸づくり

養蚕(製糸)は、幕府の奨励^{しょうれい}や藩の殖産政策により、幕末期には各地で盛んになり、養蚕・製糸にかかわる浮世絵も盛んに描かれるようになりました。

「蚕いとなみの図」は、蚕から生糸が作られる作業過程を図にしたもので、作業する人々に交ざって七福神が働いているユーモラスな作品になっています。蚕から生糸ができるまでの工程が8場面に分けて描かれています。この生糸からさらに加工されたものが絹糸になります。

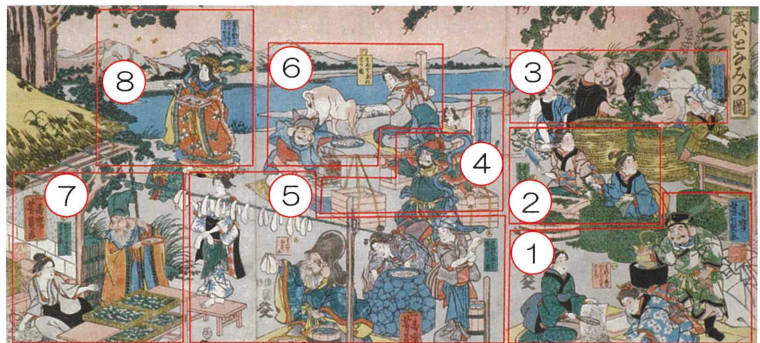


歌川芳員「蚕いとなみの図」

場面ごとに短冊形の中に、作業内容が書かれています。

- ① 生まれし蚕をかみ(紙)へうつすところ→(生まれた蚕を育てるために紙に移します)
- ② 桑をこまかにきざみたるの図→(蚕の餌の桑の葉を細かく刻んでいます)
- ③ かいこそだちて桑の葉をとる図→(大きくなった蚕のために桑の葉を集めます)
- ④ 蚕せいじんして箱へとりわけける図→(十分に育った蚕を箱へ取り分けます)
- ⑤ まゆをに(煮)て綿に引く図→(繭を煮て、綿にします)
- ⑤ わたをほす所→(綿を干します)
- ⑥ まゆを糸にとる図→(繭を引いて、生糸を作ります)
- ⑦ かいこのたねをとるの図→(蛾になる蚕の繭を枝から取り出します)
- ⑧ 蚕の蝶にけ(化)したるをはなしやるづ(図)→(蛾になった蚕を空に放します)

なぜか、⑤が2か所ありますね。続き作業だからでしょうか。説明に出てくる綿は、木綿ではなく真綿^{まわた}です。真綿は、繭を煮て引き延ばして綿状にした絹の元です。働いている七福神は、①大黒天 ③布袋 ④毘沙門天 ⑤福祿寿 ⑥恵比寿 ⑦寿老人 ⑧弁財天です。神様たちもいきいきと働いています。七福神と一緒に、質のいい生糸ができあがりそうです。



《場面ごとの配置と七福神の位置》



資料の銀ぎらぎん

きらきらと輝く銀は美しさと加工の容易さから古来より世界中で重宝されており、日本でも装飾品などに用いられています。しかし、銀は黒く変色しやすい性質があり、その理由は銀が空気中の水分と亜硫酸ガスまた硫化水素により、化学反応を起こして黒くなってしまふからです。形状によっては磨いて元の輝きを取り戻すことができ、オニカゲ学芸員も子供のころ黒く変色したアンティーク銀食器を磨いてきれいにするお手伝いをした思い出があります。

銀は日本美術にも使用されており、絵画では銀は金属を薄く伸ばした「箔」や膠で溶いた絵の具の「泥」として用いられています。図1の魚屋北溪「江島記行 六郷」は銀泥で雨を表現しており、藤沢市の所蔵品はまだ銀がキラキラと見えます。

しかし、絵画の銀も変色することがあります。図2では雪景色の中、灰のようなものが降っている風景が描かれていますが、この黒い点々は灰ではなく銀の雪が変色したものである可能性があります。

絵画作品に用いられた銀はきれいですが、変色してしまったものを磨いて元に戻すことはできません。しかし、多くの絵画資料と同様に高温多湿を避けて保存することなどによって変色を防止することは可能です。当館でも資料の状態を保つため、適切な空調管理に努めています。



【図1】魚屋北溪「江島記行 六郷」



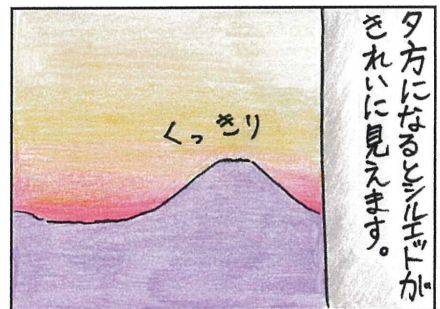
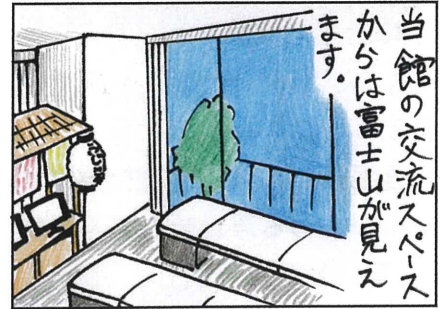
【図1】部分拡大図



【図2】歌川国貞(三代豊国)「東海道五十三次の内 岡崎駅 政右衛門」



【図2】部分拡大図



編集後記

浮世絵館としては初の試みで、藤沢市所蔵の民俗資料を多く取り入れた展示をする機会となりました。南市民図書館の市民ギャラリー常設展示室でも関連展示として、「浮世絵とみる昔の暮らしの遊戯たち」を7月23日(火)から9月16日(月・祝)まで公開します。両展示合わせて約80点となる浮世絵と民俗資料をともにお楽しみください。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00(入館は18:30まで)

【休館日】月曜日(祝日、振替休日の場合は翌平日)

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】 [藤沢市藤澤浮世絵館](#) で検索🔍

